

## 英語リスニング・テストとマーケティング実験

チェ・サンチョル

流通科学大学 総合政策学部 教授 崔 相 鐵

### 大学入試センターの英語リスニング・テスト

今年、筆者は、運悪く大学入試センター試験の英語リスニング・テストの監督に当たってしまった。このテストは、高校生が読み書きだけでなく、実用的な英語を身につけるべきだという名分で、2006年から実施されたもの。問題は、全国の各試験会場の条件を均質化する必要があるので、メモリーに録音された音声を再生するICプレーヤーによる「個別音源方式」が導入されたことである。

このテストは施行初年度から、ICプレーヤーの故障で大騒ぎになった。幸いにさすがは家電王国の日本であるだけに故障率は飛躍的に減ったものの、他にICプレーヤーに付属するメモリーカードとイヤホンの配布と操作においてあまりにも複雑な手順のために、受験生のクレームが生じた場合などはその翌日に新聞沙汰になるほど厄介なものだ。

筆者はこの試験について批判的だ。本来の意図であった高校生の英語聞き取り能力の向上が、この類のテストで果たせるはずがないと思うからだ。筆者には、機会の均質化のために、周りの雑音を完璧に遮断した上でのテストが、現実とはかけ離れた「実験室」の中での、使えない英語を押しつけているように思えてならない。よく考えれば、我々が日常で使える実用的な英語は、騒音が全く聞こえてない制御された空間ではなく、時には人混みの中で、時には雨の音や鳥の音が聞こえる自然環境の中で使われるものであるはずだ。

すべての騒音から完璧に制御された実験室のような条件で良い点数を得た受験生が、大学生活さらに企業活動で、果たして使える英語を駆使する能力を身につけることができるだろうか。無事に監督が終わり、胸を撫で下ろす筆者の脳裏に、だいぶ前に読んだ「緑の革命」(犬養道子『人間の大地』中央公論社、1983年に所収)の悲劇が思い浮かんだ。

### 実験室で育った種子の脆弱さと緑の革命の失敗

1943年、農学者・生物学者・化学者で成る4人の若いアメリカ人がメキシコを目指して南下した。彼らの荷には、麦とトウモロコシの種子と新型の強力な殺虫剤と肥料などが入っていた。食糧問題に苦しんでいたために、アメリカから穀物の大半を頼っていたメキシコは、この4人の研究チームが遂行しようとするプロジェクトのためにソノラ州の肥沃な大地を「実験場」として提供した。チームの代表者のノーマン・ボーローグ博士は1970年にノーベル平和賞を受けることになる。

新型肥料をたっぷり吸ったその大地に新型種子が植えられた。さらに細心の注意を払った灌漑施設が用意され、十分に使われた新型殺虫剤のお陰で虫の一つも呼ばなかった。種子は順調に育ち、収穫期には麦はそれまでの3倍の収穫を、トウモロコシは2倍を実らせた。しかも新型種子は、年1回収穫ではなく、年に2回～3回蒔いて穫れるものであった。すなわち麦は6倍から9倍、トウモロコシは4倍から6倍が同じ面積の



大学入試センターの英語リスニングテストで使われたICプレーヤー

農地にて保障される大成功を収めた。この実験は慎重に1967まで続けられ、結果は常に大成功であった。

1962年にはフィリピンが選ばれ、今度は新しい米の実験がボーローグ博士らによって行われた。これまた、素晴らしい結果であった。メキシコの実験場とほぼ同じ条件で蒔かれ、収穫されたその新型米に対して、マスコミは世界を永らく救う「奇蹟の米(Miracle Rice)」と賛辞を送った。この快挙は、後に「緑の革命」として命名される。飢饉問題を解決するために設立された世界銀行と世界食糧機構(FAO)は、メキシコとフィリピンでの奇蹟に歓び、途上国への緑の革命の伝播を試み、当然ながら途上国も飛びついた。

その結果、まずは、メキシコ、インド、パキスタン、トルコ、アフガニスタン、ネパール、北アフリカ諸国(以上は麦)が、次は、台湾、フィリピン、スリランカ(米)が世界銀行の援助を受け、緑の革命のための耕地を確保した。この全世界を巻き込んだ緑の革命の結果は、さすがにメキシコとフィリピンの選り抜かれた実験場での結果よりはだいぶ下回ったが、それでも以前より50%は最低多く穫れた。初期の期待値には至らなくても、大成功と言うべきものであった。

しかし、緑の革命には大きな落とし穴が待っていた。その理由は端的に緑の革命の出発点であった種子は、よく設計された実験室で人工的に創られた全く新しい人工製品であったからである。この種子は、贅沢で好き嫌いが激しく、土地の条件、雨や陽光の条件、風の条件等々にひどく神経質。よって実際の土地は、実験室とほぼ同じ条件と環境を備えた土地が求められた。その結果、緑の革命を受け入れた途上国では、肥料代が従来の5倍も要ることになった。さらに実験室の種子は、以前より何倍かの果を結ぶことになるために、どうしても従来の茎よりも太く短いものでなければいけなかった。当然ながら通風が悪く、根本は蒸れ、数々の病気にさらされやすいので、高額な大量の殺虫剤を求めた。収穫量が増えた分以上に耕作の経費がかかったために、途上国の貧農の多くは、採算の合わない農業に絶望し、代々に受け継いだ土地を手放し、都心部に逃げ込むしかなかった。

緑の革命の成敗については今でも意見が分かれるが、一握りの大企業型富農だけが潤い、大半の農民が都市の低賃金労働者に転落したために悲劇的な社会問題を孕んでいる当該途上国の現状を勘案すれば、どう考えても成功したとは言えない。

### マーケティング実験の問題点

本連載のテーマであるマーケティングとはかけ離れた英語リスニング・テストと緑の革命の議論に紙面を割愛しすぎたようだ。しかし、現にマーケティングの世界でも、不確実で予測不可能なマーケティング現場を無視して、製品開発サイドの勝手な思い込みで、どこかに都合の良い実験場を設け、新製品のデキと反響についてありきたりの実験を施し、期待された通りの実験結果に満足し、安易にそれを世に出す企業は後を絶たない。

例えば、「テスト・マーケティング」と呼ばれる手法。これは、メーカーが新製品の正式な発売前に、選定された対象地域内で販売やプロモーションを行い、製品に対する市場の反応を確認する調査のことだ。一般に実験が行われる対象地域としては、市場規模、所得水準、嗜好などの理由から、全国市場の縮図とされる地域が選択される。

残念ながら、テスト・マーケティングは、新製品のヒット率向上に結びつかないのが実態だ。英語リスニング・テストや緑の革命の事例のように、都合良く設計された実験場の中に封じ込まれ、そこに限って優秀だった受験生や種子が、厳しい実際の環境では所期の成果を出せないロジックとほぼ同じだ。製品の発売前に仮想の実験場を設けるという意味で、テスト・マーケティングと似た考え方に基づく手法として、新製品に対するアンケートやグループ・インタビュー、さらに販売シミュレーションなどがあるが、実際の環境要因を過度に単純化する恐れがある点で共通している。

テスト・マーケティングなどの手法が無用というつもりはない。ただしマーケティング戦略を実

施する企業にとって、不規則的に揺れ動く市場環境は、決して良く設計された実験場で得られた知見がそのまま通用するはずがないという認識こそが重要だ。環境不確実性を常に念頭に置きながら、外部環境の変化に臨機応変かつ謙虚に対応していく姿勢こそが必要だということを、緑の革命の教訓が雄弁に語っている。英語リスニング・テストで優秀な成績を得た受験生が、実は生きた英語をまったく駆使できない実像を目の当たりにしながら、筆者は切実にそう思っている。

この原稿は在日韓国商工会議所が発刊する会報「架け橋」148号(2012.5発刊)に掲載されたもので、発刊元並びに寄稿者の承諾のもと掲載させて頂いています。